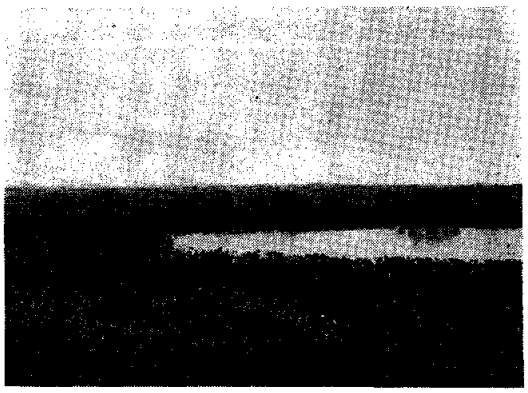
霧多布湿原（浜中町）

田中瑞穂

北海道東部の浜中町霧多布にあるもので、高層湿原を構成する中心の部分は「泥炭形成植物群落」として一九二二年以降、天然記念物に指定されている（チリ地震津波の後その区域は海岸寄りの一部を解除し、奥を少しく広げる措置によって変更された）。海岸砂丘地と背後の根室段丘との間に扇形にひろがっていて、生成の過程は釧路湿原に類似するが、地下の泥炭の層厚はほとんどが二m以下にとどまっている。南に突き出ている霧多布の台地との関連で、湿原は中央部から分かれて半面ずつ琵琶瀬湾と浜中湾に対しているのは興味を引くところであろう。



霧多布湿原

この一帯は厚岸道立自然公園に含まれる景勝の地で訪れる人も多いが、榊町寄りと散布寄りの二つの台地から湿原の全容を眼下に展望することができる。この台地上からの展望によっても、海岸線に並行するような数列の砂丘と砂丘間凹地の関連がはっきり認められ、特に砂丘間の凹地は水をためて非常に細長い沼になって残されている。

低層湿原、中間湿原、高層湿原の三つに区分することはできるが、全域を通してワタスゲが圧倒的に優占しているのを植生のうえからの著しい特色としてあげる事ができる。イボミズゴケ、ムラサキミズゴケなどと共にヌマガヤ、ヤチヤナギも多い。従って、巨視的には中間湿原の活状が強く出ていると見ることも可能であろう。ワタスゲの開花する六月中旬以降は広大な湿原全体が白くおおわれてしまうような景観になるので、非常に強い興味を引くところになる。湿原の奥の高層湿原域はチャミズゴケ丘がよく発達しており、ツルコケモモ、ヒメツルコケモモ、ヒメシャクナゲ、コケモモ、ガンコウラン、エゾイソツツジ、クロミノウグイスカグラなどがミズゴケ丘の上部をおおって生育する。しかしこのような状況はこの湿原だけのものでなく、北海道東部に点在している大小の湿原や湿地にすべて共通している。

所生植物のうちではクシロハナシノブとエゾゴゼンタチバナの二つが注目される。クシロハナシノブは釧路湿原の中のキラコタン崎下のヤチハンノキ・ヒラギシスゲ群落内で隆起したスゲ叢株の上に僅かに生育するのが知られるけれども、糸魚沢、茶内の小湿原（湿地）を経て霧多布湿原につづいている低層湿原から中間湿原に生育するのが見られる。これに対してエゾゴゼンタチバナは釧路湿原では発見されず、霧多布湿原がもっとも西の生育地になり、それより東の落石湿原、ユルリ島湿原はもとより、根室では沿岸台地上の小さい湿潤地でもごく普通に観察されるものである。

カラクサキンポウゲは小さい植物でもあり、知る人は少ないが、ここの湿原の浅い池沼で見ることができる。現在、わが国でその生育が知られているのはこの湿原の中だけであるし、その保護には意が配られていると聞いている。

ここ一〇年来、北海道東部の沿岸地域でも、放牧馬の数は急激に減少してきている。霧多布湿原の海岸寄りの地域もしばらく前まではかなりの数の放牧馬が見られていた。そのような名残りといえば正確を欠くかもしれないけれども、湿原から海岸砂丘地

に移行するあたりは「原生花園」と呼ばれて、いまも地域の人に親しまれている。エゾカンゾウ、ヒオウギアヤメ、ハマナス、センダイハギ、ヤマブキショウマなどがつくる群落である。

落石湿原（根室市）

「落石岬のサカイツツジ自生地」として一九四〇年来、湿原の一部二三・三ヘクタールが天然記念物に指定されている。現在もその区域はバラ線で囲まれて積極的に保全が図られているほか、天然記念物指定区域のうち、南に面する方向を除いた三方向が天然の大型アカエゾマツ林（魚付保安林）で包まれるような形態を示しているので、湿原の保全としては非常に望ましい形で推移してきた。

落石湿原

この湿原は同じ北海道東部の釧路湿原や霧多布湿原と違って、海抜高度五〇m弱の平坦な台地の上に構成されて点がまず注目され、湿原に流入する河川も持たず、もっぱら雨水と海霧によって保たれている。

サカイツツジはわが国ではこの湿原のみに生育するため、北緯五〇度域からの隔離分布種として強い関心を引いてきたが、この湿原の最大の特色はサカイツツジを含め、さまざまな不連続分布種をあわせもっている点にあると考えてみたい。すなわち、この湿原にはサカイツツジのほか、タカネナナカマド、イワツツジ、ホソバイソツツジ、リシリビャクシン、クロマメノキ、リンネソウ、マルバシモツケ、ミヤマハナゴケなどもあって、湿原としてはかなり小さい面積しかないことと考え合わせれば、類のないほど多くの種類の不連続分布種が集まっているということである。

このような事実は、特定の種が関心の対象になるのと同時に、不連続分布とされるさまざまな植物がいっしょになって長年月の間生育しつづけてくることができたこの湿原の環境そのものに対する関心が強められ、理解が深められてゆくことが非常に重要であることを教える。

サカイツツジに関連する群落としては〈アカエゾマツ・サカイツツジ・チャミズゴケ〉と、〈サカイツツジ・ホロムイスゲ〉の二つがあって、前者は大型のアカエゾマツ林の林縁や林縁近くの疎林の明るい林床に構成されている。チャミズゴケ、スギバミズゴケなどのミズゴケ丘をおおうようにサカイツツジが生育する。ミズゴケ丘にはそのほかツルコケモモ、モウセンゴケ、ホロムイツツジ、クロミノウグイスカグラ、エゾイソツツジ、ヌマガヤなども生育する。それに対して後者のサカイツツジ・ホロムイスゲ群落は、アカエゾマツから離れた立地にあってホロムイスゲの隆起叢株とチャミズゴケ丘の複合するところが生育地になる。

この群落の中にはワタスゲも比較的多いが、サカイツツジはワタスゲとほとんど共存せず、選択的にホロムイスゲの叢株を求めている点は興味を呼ぶところである。このためワタスゲが優占する地区に移行するにつれてサカイツツジは減少し、ワタスゲの群落内では全く見られなくなる。

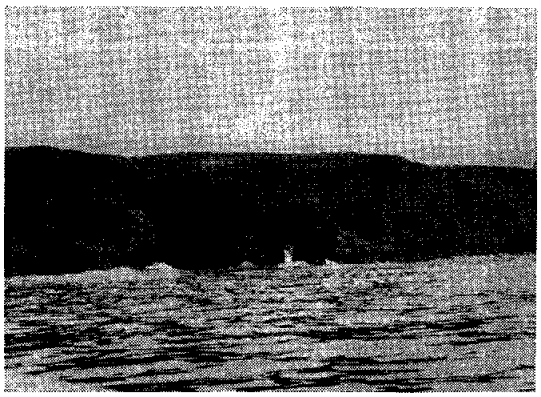
平地の湿原でホソバイソツツジが見られることも特筆されなければならないが、リシリビャクシンやミヤマハナゴケ、クロマメノキ、タカネナナカマドなどとあわせてサカイツツジの保護区域の中に生育しているから将来への存続は可能であろう。

湿原をとり巻くアカエゾマツ林は一二～一五mに達している。林内の明るさや水条件とも関連して、林床は蘚類、スゲ類、ヤマドリゼンマイ、ミズバショウと、優占植物に若干の区分をすることができる。

この湿原をとり巻いてアイヌミヤコザサを主要素とする沿岸台地特有の草原が展開している。現在放牧馬は見られないが、ハクサンチドリ、ツリガネニンジン、チシマフウロなど百花が咲いて美観を呈する。

ユルリ島湿原（根室市）

ユルリ島は根室市の昆布森漁港から海上二・六kmにある離島で、周囲約七・八kmの無人島になっている。すぐ近くにやや小さいモユルリ島があって、両島共北方系海鳥の繁殖地として道指定の天然記念物になっていることはよく知られている。落石付近の車窓からも両島を遠望することができるが、島の上部は削ったように平坦に見えるので強い印象を与える。事実、島の上に立っても林は一つもなく、目の届く限りただ草原になっている。



ユルリ島

古い海飾台で、色丹島にいたる歯舞諸島と生成の条件を同じにするといわれるところでわが国の最東端に位置するこの島の生物的自然が持っている意義はことのほか大きい。

島は東西、南北共約二km、海抜高度四三・一mで湿原は島のほぼ中央部にあって、東西約八〇〇m、南北約五〇〇mに及び、全形はゆがんだ心臓型を呈している。海霧を含め雨水のみによって保持されてきていることは一見して明らかであるが、湿原を囲むアイヌミヤコザサを主とする草原の間を島の四周に向けて大小一〇前後の沢がのび、そのうち七つの沢では少量ながら常時流水が見られるし、残りの沢は降雨後一時的に流路となる。

湿原のほぼ中心にあたる一帯は三〇～八〇cm近い高さの大型のチャミズゴケ丘が連続するところで、大きいものでは一〇〇平方mに及ぶチャミズゴケの大丘塊群を見ることもできる。このようなミズゴケ丘やホロムイスゲ叢株の間には他の湿原と同じように、小さいプールが点在し、水深は五～一五cmの範囲である。またミズゴケ丘を中心にツルコケモモ、ヒメツルコケモモ、タチマンネンスギ、ガンコウラン、エゾイソツツジ、クロミノウグイスカグラ、サワラン、トキソウなどが生育する。

エゾイソツツジ、チャミズゴケ群落を主とするこの高層湿原をとり巻く形で、いわゆるワタスゲ湿原が広く展開する。中間湿原である。ワタスゲ、イボミズゴケ、ヌマガヤが優占し、イボミズゴケの低いハンモックにはモウセンゴケ、ホロムイソウなどとともに、ヤチランを見ることが少なくない。そのほかミズチドリ、ハクサンチドリ、ホソバキソチドリ、ネジバナ、ノビネチドリのようなラン科植物にも恵まれる。ワタスゲの開花する季節の美観はたとえようもない。

つぎに、この島の植生について二つのことをとり上げておきたいが、その一つは白花品種が非常に多いことで、シロバナタチギボウシ、シロバナツリガネニンジン、シロバナエゾフウロ、シロバナハクサンチドリ、シロバナウツボグサ、シロバナクサフジなどが想像をはるかに越えた数で発見される。しかも主として島の東部、あるいは南東部に片寄って見られるのも興味深い。

もう一つは、海をへだてて向い合い本島がわの落石湿原の植物との違いの問題である。両島は若干の海抜高度の差はあるけれども、平坦な台地の上にあってマクロの環境はかなり共通していると考えられるし、現在の湿原の活状も非常に類似している。しかしながら落石湿原にあるアカエゾマツ林やサカイツツジ、リシリビャクシン、ヒメイソツツジ、ミヤマハナゴケ、リンネソウ、イワツツジは、ユルリ島の湿原では全く見られていない。それと逆に、ユルリ島で非常に数多く見られて落石湿原にないのがヤチランである。それ以外、タカネナナカマド、クロマメノキ、マルバシモツケ、エゾゴゼンタチバナなどは二つの湿原に共通している。（教育大学釧路分校）